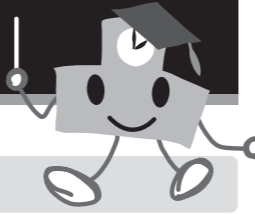


小学校の事例 北区 あいの里西小学校

大学やNPOと連携した「より自然に近い森づくり」。 種を採取し、混播法で苗を育てる。

地球のために植樹をはじめ、異種の苗を混合し競争させることで自然に近い森づくりを目指している。子供たちが身をもって体験することにより、自覚と責任が得られ、身近な自然にも配慮する意識が育っている。



はじめに 動物のため 地球のための森づくり

本校では北海道工業大学の先生とNPO団体の協力を得て、混播法を用いた植樹活動を行っている。混播法とは種類の異なる苗を混ぜて植えて生存競争させることで、より自然に近い森づくりを目指す方法である。

本校の植樹活動は、平成14年度の総合的な学習の時間の学習で酸性雨の環境調査を行ったことから発展したもので、「人間のためだけでなく、動物たちのため、地球のために、森をつくろう」を目標としている。



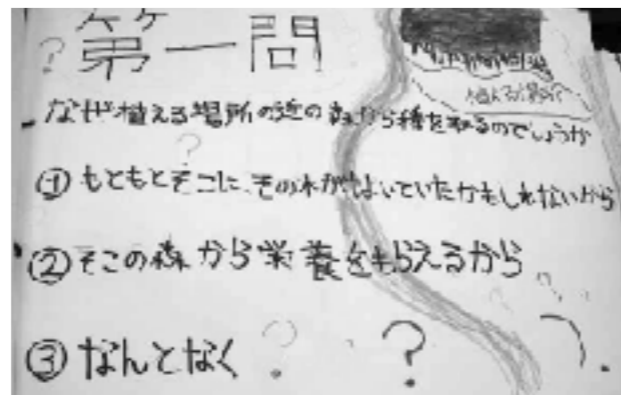
紙しばいの「混播法クイズ」

内容 地域の川に生えている木から種を採取

活動は4年生～5年生が主体となり、以下のサイクルで行っている。

- 1 4年生が総合的な学習の時間にばらと川に種(木の実)を取りに行く。実の中に入っている種を取り出し、乾燥させたあと発芽させ、1年間かけて苗に育てる。
- 2 5年生になり、自分たちの育てた苗を4年生に見てもらうため、運動会後に「引継ぎ式」を実施。4年生は苗を受け取ることで取組の成果を実感し、次に自分たちが取組む植樹活動への意欲を高める。
- 3 NPO団体と大学の先生に苗を引き渡し、石狩川の河川敷に植樹してもらう。(児童は立ち入り禁止エリアのため植樹はお願いしている)

4年生は混播法による植樹について事前に調べ、わからないことは1年先輩の5年生に質問したり、大学の先生に質問したりして積極的に学習し、苗を育てている。大学の先生やNPO団体の方々とは取組開始以降、年々スムーズに連携をとれるようになり、バスの用意なども含め、広く協力をいただいている。



紙しばいの「植樹クイズ」

課題 森づくりにより深く関わるには

本来は混播法で発芽させ苗にしたものを実際に子供たちの手で植樹し、森に育てていくのが理想である。しかし、苗を順調に育てることはそう簡単ではなく、現在は大学の先生が育てた苗を加えて植えているのが実情だ。また、植樹場所は、身近な石狩川の河川敷ではあるが、許可が無ければ入ることができない。

もう少し自分たちの目で見られる場所に植えられればよいと思うが、「自然対人間」を考慮すると、やはり譲れない部分でもあり、考えさせられるところだ。

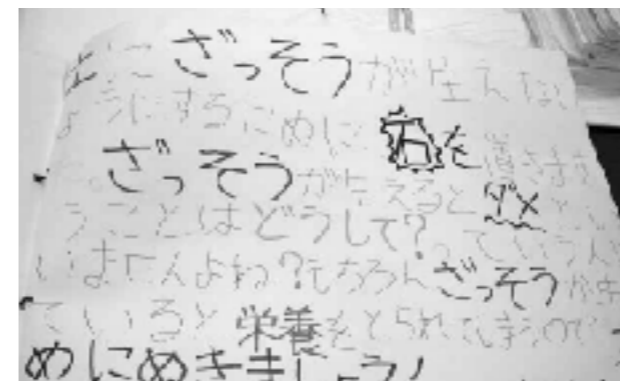


紙しばいの「どうしてジャリをうめるの?」

今後 暴風雪を防いでくれる森を自分たちが育てる

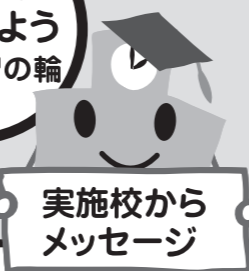
植樹する場所が身近なことから、子供たちは森づくりを身近なものとして捉えており、自然環境を大切にしようという意識が育まれている。また、実際に体を動かすことで、自分たちで活動をしているという自覚や責任感をもつようになった。

環境教育は、児童にとって生活との関わりをもったものがいちばん取りかきやすく、大切な素材である。この一帯は冬期間の暴風雪が強く、それを木々が防いでくれていることが実感できる地域である。また、体力づくりが盛んな学校で、子供たちは普段からあちこちを走りまわりながら用水路周辺など身近な自然に目を向けており、日常的に自然に触れ、大切にすることを意識が育まれている。



紙しばいで植樹の説明

広げよう
つなげよう
環境学習の輪



「環境活動」といっても線引きがなかなかできないので、難しく思われますが、色々なところで重なりが生まれ、自分たちの生きていく地球への優しさにつながります。環境問題は、1年後ではなく10年後、数十年後…といった長いスパンで考慮しなければいけないのです。「学校で学んで終わり」ではなく、「環境活動」を通して、子供たち自らが先のことを考えて、色々なことに気付き、学んでいけるようにしたいと思っています。